

文学博士佐藤 長君の『チベット歴史地理研究』に対する

授賞審査要旨

本書（昭和五十三年刊）は、漢文およびチベット語で書かれた諸史料を用いて、歴史に現われる地名・民族名・氏族名を検討し、地理上の位置を明らかにした研究で、著者がさきに発表した『古代チベット史研究』上下二巻（昭和三十三年・三十四年）と密接な関係にある。

全篇は五章に分かれる。第一章は「清代における青海・ラサ間の道程」と題して、まず西藏誌・西寧府新志・衛藏図讖に記されている兩地点を結ぶ清代の官道を考定し、これと比較しながら、第三代パンチェンラマが北京に赴いた際の順路を考え、次いで第五代・第七代ダライラマが北京に赴いた往路、第三代パンチェン・第五代ダライラマの北京からの帰路に通過した地点を比定し、大ラマたちの通過した道筋が、清の官道と一致する個所と、しない個所があることを指摘している。

第二章は「唐代における青海・ラサ間の道程」と名付け、第一章で取扱った、清代の道程について離れたりして進む唐代の所謂「入吐蕃道」を研究している。著者は鄯州をはじめとして青海の東辺にあった唐の諸城塞、ならびに黄河上流の諸城塞の位置を比定すると共に、「河西九曲の地」をマンラ川の流域と考え、次いでこれらの地方からラサに到る道筋を新唐書地理志の記載を中心として考察する。そして更にラサから進んでインドに赴く通路を考えて、

吐蕃・羊同・悉立・章求拔などのチベット諸族が拠っていた地点を定置している。

第三章は「吐谷渾における諸根拠地」という題で、第二章で明らかにした青海の東辺・南辺の地勢ならびに唐の諸城に関する知識をいわば下図とし、時代を南北朝に溯らせて、吐谷渾の拠っていた諸城の位置を水経注の記述を手懸りとして考証し、吐谷渾は遊牧生活が建前であったところから、「首都」が少なくとも三度にわたって移動した状況を説明している。そして唐の李靖による対吐谷渾作戦路（西曆六三五年）ならびに隋の煬帝の吐谷渾征討路（六〇八・六〇九年）を解明して、隋が四郡を設置するに至った形勢を説いている。

第四章「漢代における羌族の活動」は、第二章・第三章で考察した青海方面の歴史地理的知識を出発点として、溯って漢代のこの地方の情勢を研究したものである。著者は後漢書の西羌伝を用いて、燒当羌・先零羌の反乱（五七年・一〇七年）、東西羌の聯合した反乱（二四一年）について論述すると共に、諸羌族の根拠地の所在を考定し、更に羌族の来源を辿りつつ前漢時代の羌族の動静を考え、趙充国の西羌討伐と屯田政策（前六一―一六〇年）、馮奉世の征討（前四二年）について論じている。

第五章は「古代王国成立前後のチベット情勢」と題し、第四章までに論証した成果を活用しながら、西曆六・七世紀に吐蕃が政治的統一を達成した時期を中心として、諸族の居住地その他の地名を考定している。著者はまず「入吐蕃道」に沿って現われる白蘭・多弥・蘇毗などの住地を考え、次いでケーパーガトン (Mkhas pañi dgañ ston) にみえる古代王国の組織に関する記述に基づいて五翼、即ち中央翼・左翼・右翼・支翼・スンプ翼、のそれぞれについて東西南北の四至を比定し、主として中央チベットにおける地方支配者区域十八区の位置と、それを支配していた氏

族、軍事組織として各地に設けられた千人隊、ならびに国境警備隊と思われる勇士団について考証し、この王国が内部に千人隊制を有していただけでなく、外部には非チベット民族を交えた長大な防衛線を持っていたことを明らかにし、千人隊というのはもともとトルコ系の軍制を学びとったものと認めている。そして隋書の附国伝、および敦煌見ペリオ蒐集文書の吐蕃王統記にみえる「十二小王国表」を検討してその位置を定め、またチベットの総称として用いられたツァン (Gtsan) とボエ (Bod) の意味する範囲を考定している。

最後に著者は結言として古代チベット族の活動の歴史を素描しており、また別に七枚の付図を添付して、それに本文で論証した比定の成果を図示している。

本書は著者自身が述べている如くに、古代王国と中国との交通路を明らかにし、古代王国成立前後の諸族の位置を確定し、王国内部における各部族の位置をも明確にすることを目的としているのであって、そのために史料の豊富な清代から出発して時代を溯りつつ歴史地理の研究を進め、統一時代以前までも含めて総括的に論証を行ったものであり、この方法をとることによって解明できた事項が甚だ多い。チベットの歴史地理に関してはなお今後の研究にまっべきところがあるが、本書は著者の『古代チベット史研究』と相まって、古代統一王国に関する知見を大きく進展させており、またその前後の時代の歴史地理の研究にも貢献するところが少なくない。